

被服のイメージにおける性差について

梅花短大 家本修 鳴門教育大 広瀬月江 大阪科教セ ○西澤悦子

目的：被服の機能の中で保健的機能に対して、社会的機能面の教育が少ないのが現状である。ところが、一般的な社会では、青少年の被服の着用時での自信の無さや社会規範との不一致感など若年者に戸惑いがみられる。そこで、中・高校生がこの社会的機能面において、いかに被服のイメージを把握しているかを授業実践を通して実験・調査を行い、性差について検討した。本報では、まず中学生の被服のイメージ調査について報告する。

方法：中学生を対象に授業実践を行った。時期は昭和63年1～2月。実施校は、大阪府八尾市立T中学校。対象は第1学年、男子80名、女子66名。指導の領域は、被服1である。手順は、事前調査、授業実践（イメージ調査、教材でもある）、事後調査、感想文の順に実施した。授業中のイメージ調査は、数名を1グループにし、各グループごとに6サンプル（男子の写真3枚、女子の写真3枚）の写真パネルを提示し、各人でSD法により評価を行い、グループや成人間との比較から各人のイメージの位置付けを検討した。

結果：プロフィール、因子分析、分散分析、T検定などの結果から、①イメージの3因子を抽出「デザイン性の因子」「内面性の因子」「装飾性の因子」である。②「かたぐるしい」とイメージした「女性的」な写真では、女子は男子に比べ「やさしい」が「かたく」「不調和」「下品」であると批判的な評価をしている。③この②の写真は「気高さ因子」「フェミニン因子」「活動性因子」によって構成されているが、古くて暗いイメージを持ち、女性的でやぼで、地味でつまらないと評価している。これらから、被服のイメージにおいて中学生もすでに同性への評価が厳しく、社会的傾向と類似していると推察される。